



R8.6.26 令和8年度第2回小高区義務教育学校設立検討準備協議会資料
(南相馬市教育委員会事務局教育総務課)

資料 4 - 1

小高小中学校の小中一貫教育の 現状評価について



1 なぜ今、学校のあり方を考えるのか

これまでの経過

時 期	内 容
令和元年 9 月	■小高区学校統合に関する意見書提出(小高区学校適正化検討協議会→市) ・出された意見：「小高区の4小学校の合同運営を解消し1校に統合すべき」
令和元年11月	■小高区学校統合準備協議会及び専門部会設置 (行政区長、PTA、認定こども園保護者、学校評議員、学校長) ・取り組んだこと：学校統合に向けた様々な検討及び準備を行う
令和2年5月	■小高区学校統合準備協議会中間報告書提出(統合準備協議会→市) ・出された意見： 令和3年4月時点では、施設分離型の小中一貫教育とした開設が現実的。施設一体型の小中一貫教育や義務教育学校の教育効果を慎重に分析し、施設一体化の実現性に加え、将来の小高区小中学校の目指すべき教育環境について今後も引き続き協議を進める。
令和3年4月	■新小高小学校開校：施設分離型で小高中学校と小中一貫教育を実施

ポイント！：○現在、令和3年4月より施設分離型の小中一貫教育開始から5年が経過
 ○これまでの取り組みによる成果や課題から、目指すべき教育環境のあり方を検討したい



2 小中一貫教育の「理想の姿」

文部科学省の「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」によると・・・

■ **目的**：義務教育9年間を見通し、系統性・連続性を確保した教育課程を編成・実践すること。

【ポイント】

「15歳の卒業時、どのような子どもになってほしいか」という9年間のゴールを共有すること



系統性・連続性がスムーズだと・・・

■ **期待される効果**：

- 教育内容や学習活動の量的・質的充実
- 発達の早期化等で見られる発達上の段差の緩和
- いわゆる「中1ギャップ」（小学校から中学校進学時の不適應）の軽減
- 社会性育成機能の強化

等がある。

そのための取り組みとして、相互乗り入れ指導※、異学年交流、合同活動などが行われている。

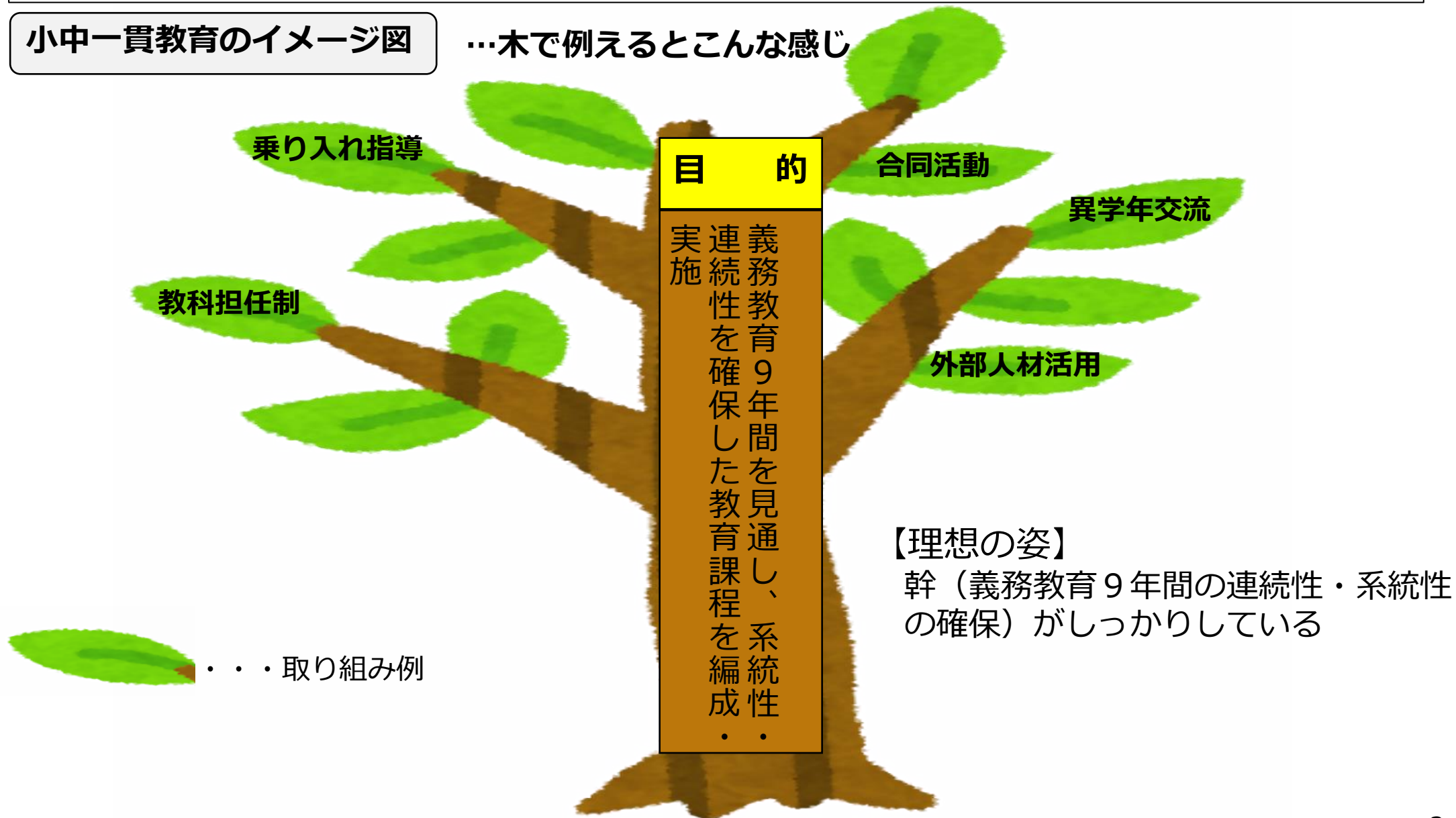
※相互乗り入れ指導：小学校と中学校の教員が協力して授業を行うこと。



2 小中一貫教育の「理想の姿」

小中一貫教育のイメージ図

…木で例えるとこんな感じ



【理想の姿】

幹（義務教育9年間の連続性・系統性の確保）がしっかりしている



2 小中一貫教育の「理想の姿」

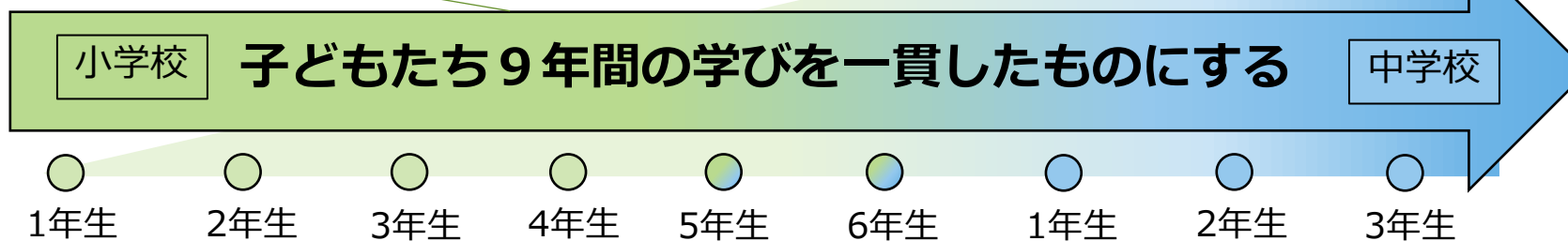
系統性のある教育のイメージ図

長期的な教育が可能

- ・義務教育9年間を通じた一貫した教育課程で、学習の定着や補習がしやすい。
- ・小学校（前期課程）と中学校（後期課程）の垣根を越えた活動や行事ができる。
- ・児童生徒の成長を継続的に見守り、個性を伸ばしやすい。

教科担任制

- ・小学校高学年から教科担任制を導入し、専門性の高い授業を提供。



乗り入れ授業

- ・中学校教員が小学校に出向くことで、指導の質を向上させ、教員間の連携を強化。

異学年交流

- ・年齢の異なる児童生徒が関わることで、思いやりや助け合いの精神を育む。
- ・上級生が手本となり、下級生が憧れる関係性が生まれる。



3-① 現状の成果と課題（小中一貫教育の本来の目的）

【視点1】

小中一貫教育の目標である「義務教育学校9年間を見通し、系統性・連続性を確保した教育課程を編成・実施すること」について

取り組んでいること

■ 系統性・連続性を確保した教育課程：

「生活・総合」の教科で9年間を見通した教育課程を編成し、学習に取り組んでいる

- 「小高小中学校チャレンジ構想」において、「ふるさと『小高』～小高のよさを見つけよう！未来へつなげよう！」の目標を掲げ、小中学校の系統性を考慮した学習の推進を図っている。

取り組みの成果

■ ふるさと小高への郷土を愛することや誇りを育む：

- 発達段階に応じたテーマを設定し、幼少期から小高の自然、文化、産業に触れ、郷土（小高）を愛する心を育成し、地域への関心や愛着が深まった。
- 地域の方との交流を通してコミュニケーション能力が向上。
- 将来の地域づくりについて主体的に考えることができるようになった。



3-① 現状の成果と課題（小中一貫教育の本来の目的）

課 題

■ 全部の教科での連続性を確保した教育課程の編成：

- 「生活・総合」**以外**の教科では、9年間を見通した教育課程の編成が難しい。

【理由】教職員の専攻や指導法の違いに加え、教科指導上の情報共有が日常化していない。



課題の原因：施設分離・学校組織の違いが原因として考えられる。

【課題のポイント】

- 義務教育9年間のゴール（15歳の時の姿）を教職員全体で共有できないことが最大の壁。
- **ここを改善することで、小学校・中学校間の『学びのバトン』がより確実につながる。**



3-② 現状の成果と課題（小中一貫教育の様々な取り組み）

【視点2】

小中一貫教育としての取り組みの成果と課題について

取り組んでいること

■ 乗り入れ授業：

- ① 外国語活動・外国語・音楽科で、中学校教諭による小学校での乗り入れ授業
- ② 理科で、小学校教諭による中学校での乗り入れ授業

※小学校教諭は中学校の授業では、補助的な立ち位置で授業支援を行う

取り組み成果

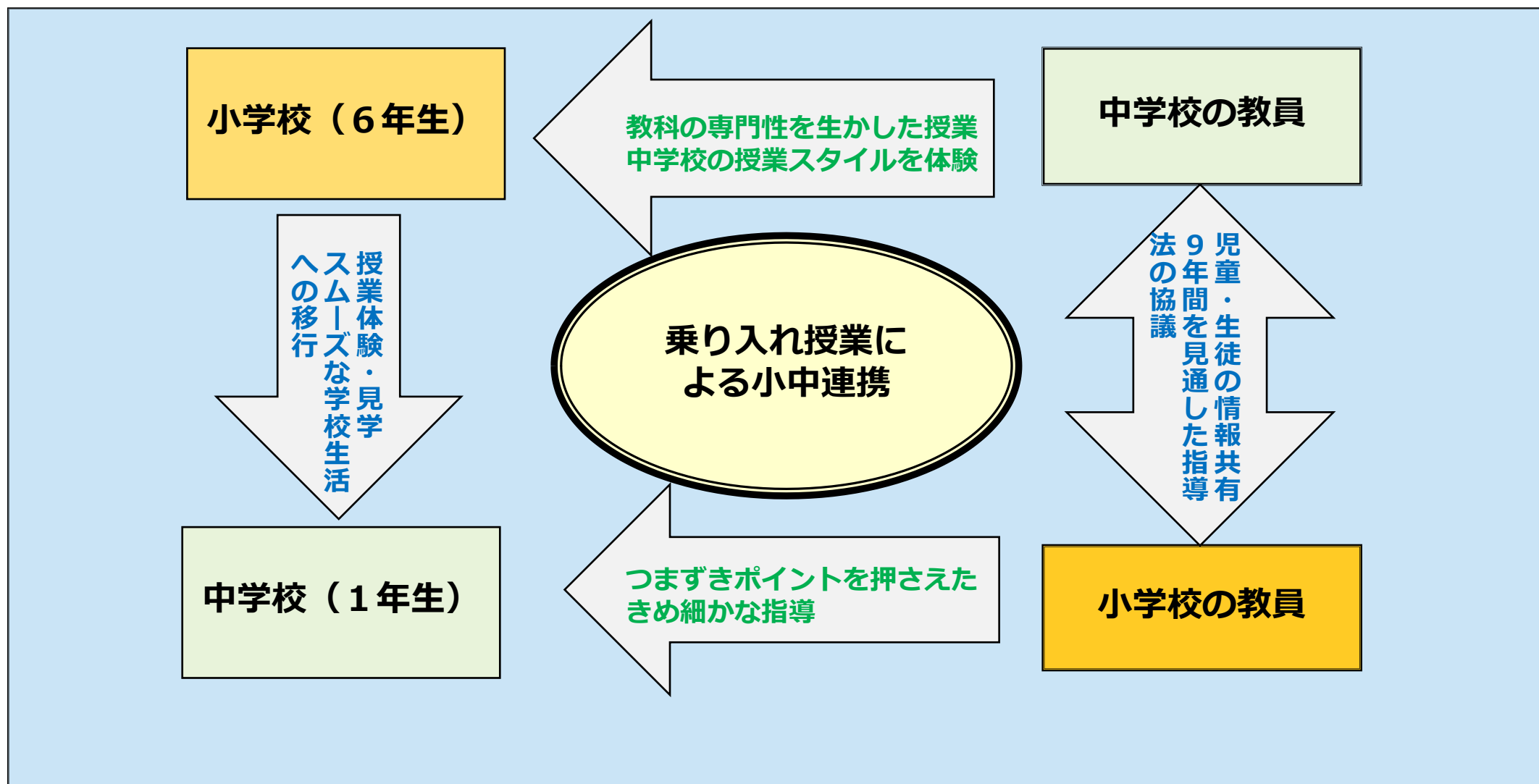
■ 乗り入れ授業：

- ・ 中学校の英語が全国の正答率を上回っている（令和6、7年度時点）
- ・ 児童の学習意欲が向上
- ・ 中学校の学習スタイルを先取りすることで、児童の安心感につながった
- ・ 中1ギャップ（小学校から中学校進学時の不適応）の軽減
- ・ 異校種の視点により、教員の指導力が向上



3-② 現状の成果と課題（小中一貫教育の様々な取り組み）

【参考】 乗り入れ授業の効果イメージ





3-② 現状の成果と課題（小中一貫教育の様々な取り組み）

取り組んでいること

■ 合同授業・合同活動（異学年交流）：

- ① 合同での体験活動、地域清掃活動の実施
- ② 幼小中が連携した避難訓練の実施
- ③ 部活動の交流

取り組み成果

■ 合同授業・合同活動（異学年交流）：

- ・ 上級生が下級生を思いやるなど、心の成長が見られた。
- ・ 中学生が、小学生の手本となる自覚を持つようになった。
- ・ 小学生が中学生に憧れを抱くようになった。（ロールモデル効果）
- ・ 異年齢交流で心理的な距離が縮まった。
- ・ 児童の中学校進学への不安が軽減され、入学後の人間関係構築が円滑になった。



3-② 現状の成果と課題（小中一貫教育の様々な取り組み）

取り組んでいること

- ふるさと「小高」の地域学習・体験活動
- 生徒指導・特別支援・学校保健の包括的实践

取り組みの成果

■ ふるさと「小高」の地域学習・体験活動：

- ・ 地域への感謝の気持ちや関心・愛着が高まった。
- ・ 地域住民との交流を通してコミュニケーション能力が向上
- ・ 地域の未来を自分事として捉え、主体的に考えるようになった。

■ 生徒指導・特別支援・学校保健の包括的实践：

- ・ 問題行動の未然防止や早期対応が可能となった。
- ・ 児童生徒への理解が深まり、保護者との連携も円滑になった。
- ・ 共通のルールや見守り体制が、子どもの安心感につながっている。



3-② 現状の成果と課題（小中一貫教育の様々な取り組み）

課 題

■ 乗り入れ授業：

- ・ 教員の移動や調整に多くの時間が割かれるため、その分、子ども一人ひとりと向き合う時間や、より良い授業のための準備時間が十分に確保しづらい状況。

➡ 課題の原因：施設分離が原因として考えられる。

- ・ 授業時間がそれぞれ、45分・50分であることや日課表が異なり、授業回数の安定確保が難しい。

➡ 課題の原因：学校組織の違いが原因として考えられる。



3-② 現状の成果と課題（小中一貫教育の様々な取り組み）

課 題

■ 合同授業・合同活動（異学年交流）：

- ・ 移動時間や安全確保、活動場所の調整が必要。
- ・ 教員間の指導方針のすり合わせが時間的・物理的に行いにくい。



課題の原因：施設分離が原因として考えられる。

- ・ 準備や安全管理の負担が大きい。
- ・ 小中学校で日課や年間行事が異なり、共通の日課確保が非常に難しい。
- ・ 教員の移動に時間がかかり、時間割調整や授業前後の打ち合わせが難しい。



課題の原因：学校組織の違いが原因として考えられる。



3-② 現状の成果と課題（小中一貫教育の様々な取り組み）

課 題

■ ふるさと「小高」の地域学習・体験活動：

- ・ 年間計画のすり合わせや打ち合わせの時間を確保しにくい。

➡ 課題の原因：施設分離が原因として考えられる。

- ・ 教員交代時の引き継ぎ（地域の特性や経緯の把握）に時間がかかる。

➡ 課題の原因：学校組織の違いが原因として考えられる。

■ 生徒指導・特別支援・学校保健の包括的实践：

- ・ 不登校傾向の児童生徒に関する情報共有に時間差が生じる。
- ・ 指導基準（身だしなみ等）に差があると、進級・進学時に子どもが戸惑う可能性がある。

➡ 課題の原因：施設分離・学校組織の違いが原因として考えられる。



3-② 現状の成果と課題（小中一貫教育の様々な取り組み）

【課題のポイント】

- ここを改善することで、以下のような点をもっと充実させることができる。

【学習面への影響】

- ・ 教員の移動や調整に割いていた時間を、質の高い授業準備や子ども一人ひとりと向き合う時間へ振り向けることができる。
- ・ 教員同士がいつでも打合せをしやすいことで、9年間を見通した一貫性のある学習計画を立てやすくなり、学びが途切れることなく、子どもたちの力を着実に伸ばしていくことができる。

【生活への影響】

- ・ 教員が子ども一人ひとりと向き合う時間が増え、日々の様子の共有も迅速になるため、小さな変化にも早く気づき、これまで以上にきめ細かな対応が可能となる。
- ・ 学校生活のルールが統一されることで、子どもたちは進級・進学の際に戸惑うことなく、安心して新しい環境に馴染むことができる。



3-③ 現状の成果と課題（総括）

小中一貫教育の 本来の目的	取り組み項目	現状の評価	課題（施設・制度の壁）
教育課程	9年間の系統的指導計画	△	・生活・総合は○だが、教科指導の系統性は△ ・学校組織の違いがあり、教科間の連携が十分にできない。
小中一貫教育 取り組み区分	取り組み項目	現状の評価	課題（施設・制度の壁）
指 導	乗り入れ授業（英語等）	○	・教員の移動の負担・時間の制約がある。 ・調整に時間がかかる。
連 携	小中教員の共同研修	△	・時間確保が困難。
交 流	合同行事・交流活動	△	・調整に時間がかかる。 ・準備、安全管理に負担が大きい。
指導体制	生徒指導・特別支援の共有	△	・情報共有にタイムラグがある。
制 度	日課・時程の統一	×	・施設及び学校組織が異なっているため、困難。